



米づくりを通して学んだ事

桐生市立清流中学校 3年 上岡 紗奈

「とーうかんや、とーうかんやー。」

秋になると、この元気な掛け声が私の住む町に響いてきます。

この「とーうかんや」とは、漢字では「十日夜」と書きます。稲の収穫に感謝し、来年も豊作になりますように、と祈る行事で、わらで作ったわら鉄砲を掛け声に合わせて歌いながら、地面に強く叩きつけます。そして、モグラや害虫を畑から追い払い、田んぼの神様に収穫した米で餅をつき、お供えます。

私の住んでいる町は、稲作をやっている農家や田畑は少なくなりましたが、地域の高齢者の方々が毎年、五月には田植え教室、九月には稲刈り教室、十月には十日夜（とーうかんや）、一月には餅つき大会、しめ縄・門松（かどまつ）作り教室など、昔の人の知恵や工夫を生かした行事を数多く催してくださっています。私はこれらの行事に幼い時から行っていました。

初めてこれらの行事に参加したのは、幼稚園の年長の時でした。当時は近所の仲の良い友達も年上の子ばかりで、同級生の友達が少なく、「小学生になったらどうしよう…。」と不安でいっぱいでした。

ある日回覧板で、公民館主催の田植え教室の記事を見つけ、申し込みをしてみました。行ってみると、そこには違う幼稚園や保育園に通う同級生の方がたくさんいて、私はあっという間に仲良くなれました。

毎年必ずこれらの行事に参加して、気付けば私達は小学六年生になっていました。中学生になると土曜、日曜は部活があるので地域の行事には参加出来なくなってしまいます。だから、六年生は田植えや稲刈り、十日夜が出来る最後の年となります。私達は少し寂しいような気持ちで、最後の十日夜に参加しました。この行事は桐生市でもすっかり有名になっていて、桐生タイムスの記事として私達の写真やインタビューも掲載されていました。

最後となる十日夜は今まで以上の盛り上がりで、地域の方や保護者まで一緒にやっていました。十日夜が終わると、地域の婦人会の方が毎年恒例のおにぎりとお汁を作って持ってきてくださいました。みんな近くの小川に行き、仲良く昼食を食べた後、参加者の中で最高学年だった私達が、低学年の人達へのメッセージを伝え、最後の十日夜は終わりました。

私がこれらの行事に参加して良かったな、と思った事が、三つあります。

一つ目は、食べ物があるというありがたさを、自分の目で見て体験した事で、肌で感じられた、という点です。日本は食料自給率が低く、食べ残しのゴミが多いのが社会問題となっていますが、今回の体験で昔のような自給自足を取り入れてみたり、地産地消を心がけたらこの問題の解決に、一歩近づけると思いました。

二つ目は、昔の人の知恵や工夫を直接教えてもらえる、という点です。農業に関する事だけでなく戦争の話も聞かせてもらったので、学校や教科書では習えないような、貴重な経験となりました。

三つ目は、何よりも自分で植えて自分で刈ったお米がとてもおいしかった事です。汗水たらして腰が痛くなりながら育てたお米は、家で食べるご飯よりも甘く、私にとって大切な思い出の味となりました。それと、昔の人は機械も使わず全て手作業でお米を育てていたのです。昔の人は大変だっただろうな、と改めて実感する機会となりました。

私が七年の間にたくさんの方々に教えてもらった事を忘れずに、次の世代へ、そしてまた次へと、語り継がれていくと良いな、と思います。